STAY GOLD

中野　里美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＴＡＹ　ＧＯＬＤ

【Ｎコード】
Ｎ８３０７Ｓ

【作者名】
中野　里美

【あらすじ】
高校生のバンドの話です。

グリーンデイ、ＮＯＦＸ、オフスプリング、ハイスタンダード、けむり、スネイルランプをＭＤに入れて毎日聴き、聴いてる間は怖いものなしになれた高校二年生の夏ごろ。

僕はロック部といったなんとも頭の悪そうな名称の部活のメンバーだった。そのメンバーにはやはり頭の悪い奴がそろっていて、そいつらを一言で表せば本当になんの価値もない屑だ。いや、それでも楽器を持たせたらすごい熱心なんじゃないの、とか思われても、そんなことは微塵もなかった。楽器も下手だし、センスもないし、練習もしない。それどころか練習のやりかたが間違っていた。ひどかった。

僕はギターとヴォーカルを担当し、他にベースとドラムがいた。三人。スリーピース。この屑共をどうにかまとめて、なんとか三ヵ月後の学園祭までに五曲の演奏をマスターし、まぁまぁどうにか学園祭を成功させたかった。顧問の老先生がとてもいい人で、僕は好きだった。老先生に「成功させて」と言われたのが、僕の気持ちに目的をもたせたのだ。

旧校舎の片隅にあるほこり臭い小さな教室がロック部にあてがわれている部室で、一通りの機材がある。七時までしか使えないけど、お金のない高校生にこの部室はありがたい。そんな部屋に放課後、僕たちは集まっていた。

僕はパイプ椅子に腰掛けて言った。

「そろそろ学園祭で演奏する曲決めたいんだけど、なんかやりたい曲ある？」

アンプに腰掛けて脚を組んでいたベースの池田が、欠伸をして目をこすりつぶやいた。

「ねみぃ」

おまえ今日の授業一日眠ってたじゃねぇか。

ドラムのジュンは、両手を腹にあててうつむいていた。よく胃が痛むらしい。
「大丈夫か？」
と僕はジュンに訊いた。
「さっき食ったカラムーチョが刺激するんだよ」
「なんで胃が悪いのにそんなの食うんだよ！」
「好きなんだよ！　うまいから！」
僕はウンザリした。こいつら死ね、まじ死ね。なにがカラムーチョだよ、馬鹿じゃねぇのか。
「なに食べようがお前の勝手だよ。でも一言いわせろ死ね」
ジュンは笑った。僕も胃が痛くなってきそうだった。
去年はよかった。
卒業してしまった三年生は本当に演奏がうまくて、僕はそんな先輩と一緒に演奏できることがとても嬉しかった。去年のこのくらいの時期に、いきなりロック部の先輩が一年の教室に現れて、教壇に立って言った。「こんなかにギターできる奴いる？　はいできる人挙手挙手」その先輩はあまりにもヤンキーで茶髪でピアスでタトゥだった。僕はビビリながらも、好奇心で手を挙げた。
先輩はこっちを見ると笑顔で言った。「まじで！　どんくらいできるの？　どんな曲ひける？」僕は練習していた曲をいくつか挙げた。先輩は、「きみ最高。今日の放課後空いてる？　まじ。じゃあロック部ってとこに来て！　待ってるから。あ、名前教えて、おっけ。楽しみにしてっから！　ちゃんと来るんだぞ！」と言って出ていった。
部室に行って、他の先輩ともいろいろ話をした。すぐにパートをもらって、僕はその日から猛練習をした。先輩に教えてもらい、ライブに連れて行ってもらったりもした。そして、その年の学園祭は信じられないくらい盛り上がった。かっこよかった。まじですごかった。僕はそのライブですごいカタルシスを得て先輩にとてもとても感謝をした。

そして今年。胃の弱いガリガリに痩せたノッポのドラムと、ヤンキーに憧れる貧弱体質のベース。あがり症の僕。
「オフスプがよくねぇ？」
と池田が言った。
「ヴォーカルがいればできないことないけど、だれか歌える人知ってる？」
「知るわけねぇだろ」
「じゃ却下だ」
ジュンはまたカラムーチョを食べだしていた。
「ジュンは？　何がいい？」
「あぁ？　なんでもいい」
むしゃむしゃ。
無難なのはハイロウズかモンゴル８００だろうな。三人で弾けるし、難しくない。それに皆知っている。学園祭のテッパンだ。でも、僕はどうせやるなら好きなバンドのコピーをやりたかった（もちろんオリジナルなんて選択肢はない）。
「ハイスタはどう？」
「あぁ」
と池田がつぶやいた。それは、ハイスタが何者か思い出そうとしているみたいだった。ジュンに関しては「だれ。なにそれ？」と訊いてきた。
僕は無視して言った。
「ＭＤとスコアは僕が用意するから。明日渡すよ」
二人は納得したみたいだった。そのあと、僕らは一時間ほど演奏した。弾いた曲はグレイとラルクとハイロウズだった。下手糞だ。でも演奏している間は楽しかった。屑で下手糞だけど、一緒に演奏して一つの曲を作り上げると、一体感が生まれて、その空間が楽しさで包まれる。僕はこの感じがとても好きだった。他の二人もやっぱり楽しそうだった、と思う。

僕たちはその『ハイ・スタンダード』といったバンドの曲を練習した。最高にカッコいいバンドだ。知ったときには解散していて、ライブに行くことはできなかったけど、ライブビデオを一年間で百回以上観ていた。でも、そのたびに熱くなった。

で、スコアを渡した一ヵ月後。僕らは部室にいた。

「なぁそろそろ学園祭の曲練習しようよ。覚えただろ？」

池田が思い出したように言った。

「スコアなくしちまったよ」

僕のいつも作っている微笑は勝手に消えていた。口元にチックが走っていた。

池田が言い訳をはじめた。

「いや、だってよ、母ちゃんが俺の部屋に入って勝手に捨てちまったんだよ。母ちゃんすぐ捨てちまうからさ！　んであとでゴミ袋あさったんだけど、猫のクソがひっかかってて臭えんだわ。それでもうこれ捨てるしかないと思ったんだよ。って捨てるだろ、猫のクソがかかってるんじゃ。安心しろって！　半分くらいは覚えたから。それにまだ二ヶ月もあんだしさぁ」

池田は愛想笑いを浮かべた。半分覚えたならまだマシだろ、と僕は思った。

「とりあえずスコアは用意してやる」

池田はほっとしたように「おう」と言った。

で、僕と池田はジュンを見た。ジュンは僕たちに向かって親指を立て言った。

「完璧」

「まじで！　全曲マスターした！？　やればできるじゃん！」

池田も言った。

「たまにはいい仕事するじゃねぇかよ」

「本気だせば楽勝だって！」

そして、とりあえずできる曲だけ練習してみた。

クソみたいな音だけど、とりあえず形にはなっていた。

「あと二ヶ月あれば、なんとかなりそうだな」
と僕は二人に言った。二人は頷いた。僕らはコピー室でスコアをコピーさせてもらい、部室の鍵を閉めて職員室の老先生に返し、さよならした。
池田は最寄り駅から電車を使うから校門でお別れだ。僕とジュンは自転車で通っていて、帰り道もだいたい一緒だった。途中で僕とジュンはアイスを買ってコンビニの外で話をした。
「なぁ。おれさぁプロ目指そうと思うんだよ」
とジュンはガリガリ君をなめながら言った。
「まじ！」
「あぁ、そのことおばあちゃんに言ったら、学費出してくれるって言うんだ。まじ感動しちまって」
「学費って？　専門学校行くつもりなのか……」
別に悪いことじゃない。でも、大丈夫なのかと僕は思った。ジュンはプロの世界で生きていけるのだろうか。彼は、ドラムを始めてまだ一年だった。半年前にロック部の門を叩いて、始めてしっかりとしたドラムに触れたらしい。それまでは、スティックだけで、茶碗を叩いていたのだ。よく知らないが、そんな練習方法があるのだと彼は話していた。
「僕は応援するよ」
「ありがとうよ」
と言ってジュンは空を見上げた。

僕はロック部の練習は週に二回しか行けなかった。週に五日はバイトがあり、学費から食費から稼がないといけなかったからだ。その時間の合い間を縫って自分のパートを練習するのに必死だった。
そんなんで夏休みに入った。僕はほぼ毎日バイトでロック部の奴らと会うことはなかった。一回だけスタジオを借りて練習しようとしたけど、池田が熱を出して予定は潰れた。
夏休み明けに、僕は久しぶりにロック部の部室にいた。

一人で練習していると、顧問の老先生が訪ねてきた。こんにちは！　とあいさつをすると老先生は笑顔になった。
「学園祭がんばれよ。しっかりビデオにとってやるからな」
「うす。あいつらもなんとか曲覚えてたし。今年もうまくいくよ」
老先生は微笑んだ。この人は、実は音楽のことなんてなにも知らないんだ。楽器もできない。でも、僕らみたいな馬鹿のために色々協力してくれる。コピー室を黙って使わせてくれたり、こんな部のために部費を用意してくれたり、それで機材を買ってくれたり、たまに遅くまで部室を使わせてくれたりする。僕は迷惑かけているなと思いつつ、老先生に甘えていた。
老先生は僕の演奏を聴くと「いい曲だな」と言って立ち去った。メロコアなんて老先生にはうるさいだけに決まっているのに。
しばらくして池田とジュンが来た。こいつらコンビニに買出しに出かけていやがったらしい。
ジュンはまた辛いお菓子を食っていた。池田は胸ポケからメンソールライトを取り出して、吸おうとした。
「学校だぞ」
「いいだろ別に。黙ってりゃわかんねーよ」
「さっきここに生活指導が来てたからな」
そう言うと池田はタバコをしまった。僕はため息をついた。
「あと一ヶ月だけど、夏休みの間に練習したか？」
「おう」
と池田は声をひっくり返して返事した。ジュンが親指を立てていた。
「じゃあ、久しぶりにやろう！」
僕は夏休みの間に買ったエフェクターをセットして音を調節した。僕はギターのブラッシングといった技術の歪んだ音が大好きだった。もらい物のギターは通販の安物で、エフェクターも一万くらいの安物だけど、まぁまぁの音が作れたと思う。
池田もアンプの音を調節した。こいつは不良ぶっているけど、全

然不良じゃなくてそのうえ几帳面だった。僕のギターのボリュームに合わせた。
僕らのテンションはメモリ一つ分あがった。
ジュンが吼えた。
「行くぜ！」
スティックを三回鳴らす。
チャーチャッチャッチャーチャチャーチャチャチャチャ――。ギターとベース、ドラム、ヘッポコな音だ。でも僕は歌った。やっぱ楽しいんだ。この一体感はやっている人間にしかわからない！　一曲終了したとき、池田が言った。
「なぁおい！」
「どうしたんだよ？」
「こいつのドラムなんかおかしくねぇ？」
「おかしくなんかねぇよ」
とジュンは言い返した。
「ちょっともう一回叩いてみろ」
ジュンはスティックを鳴らすところからやり直した。
僕もおかしいと思った。足りない。重要なものが足りない。
「ジュン。わかってるんだよな」
「なにが！？」
「なにがじゃねえよ！　なんでバスドラ叩いてねーんだよ！　飾りかよ！　ふざけんなよ！　死ねよ！」
僕は声を荒げた。ジュンはバスドラムという重要な箇所を叩いていない。足を使って叩くドラムだ。
池田が駄目押しした。
「それにリズム遅くね」
ジュンは顔を真っ青にして声を荒げた。
「だって難しいんだよ！　足と手が動いちゃってさ！」
「馬鹿野郎！　それなら猿にだって叩けんだろ！」
「猿には叩けねぇよ！　だって猿はスティックもてねぇもん！」

「そういう事言ってんじゃねぇよ！　反省しろって言ってんだよ！
猿はスティックもてねぇもんじゃねぇよ！　馬鹿かてめぇは！
本当に猿か！　死ね！　まじ死ね！　てめぇは生きてる価値のないクソ野郎だ！」
「人に死ねっていうなよ！」
「せめて、リズムをもう少し早くできないのか……？」
「腕の関節が痛むんだ……」
目の前をゆらゆらと煙が漂ってきた。見ると、池田がメンソールライトを吸っていた。僕はもうなにも言う元気がなかった。けど、最後につぶやいた。
「今まで聴き取れなかった、僕がいけないんだ……」
下がりきったテンションは戻らず、僕はギターをスタンドに掛けた。
「会議だ。会議をする。このままじゃとんだ赤っ恥だ」
池田がアンプの角でタバコをもみ消してから言った。
「やめようぜ」
「もう、ＰＡの予約はしてあるし一応伝統でもあるんだよ。それに僕はやりたい。ジュン！　僕はドラムのことわかんないけど、バスドラ叩けるようになりそう？」
ジュンはうつむいて、お腹を押さえていた。
「わかった。バスドラは諦めるよ。そんなのなくてもわかりゃしないさ。でもスピードとパワーはもうすこし頑張れるだろ？」
ジュンはなにも言わなかった。
「それも諦めよう」
まじで猿だこいつ、と僕は思った。プロになるんじゃなかったのか。茶碗ドラムでも作って猿の物まねして道端で小銭でも恵んでもらっていろ、屑。
「一応、今の状態で全曲やってみよう」
全曲やり終えた。もうぐちゃぐちゃだった。最初の三曲はまだ、なんとかミスがなく弾けていた。でも、残りの二曲がひどかった。

とくに、スピードの速い曲のドラムは最悪だったし、池田はコード進行を適当にごまかしていた。覚えていないのだ。ベースの音はわかるんだよ！

「お前はまともだと思ってたのに……」

「いや、すぐ思い出せるよ。大丈夫だって、まだ一ヶ月もあんだから」

僕はふとなんでこいつらとバンドなんか組んでいるんだろ、と思った。そして、ギターでこいつらをめったんめったんにぶん殴ってやればすっきりするんだろうと思ったけど我慢した。

時間になって僕らは帰った。

結局、その後の練習でもジュンはバスドラを叩けなかった。池田はとりあえずベースを覚えてきたようだった。僕も決して上手くない。歌もギターも人並みだ。でも、メロコアは技術よりテンションなんだ。ハートなんだ。パフォーマンスなんだ。だから僕は、覆面を買った。

学園祭当日。僕らは私服で舞台にあがった。本当は駄目だけど、老先生が大目にみてくれたのだ。舞台衣装ということで。

僕はハイスタのTシャツに古着のデニムパンツを腰ばきして先輩からもらったターコイズのチョーカーをつけていた。池田はジーンズメイトのファッションだった。猿は近所のスーパーのファッションだった。制服でやればよかったと僕は後悔した。

僕は銀行強盗がかぶるようなニット帽を頭からかぶって舞台にあがった。

まだ暗幕が下がっている。学園祭のライブなんてぶっちゃけ暇な奴がちらほらいるだけなはずなのに、どういうわけか体育館は半分くらいの人間で埋まっていた。僕はふざけんなと思った。

ジュンは今日は調子が悪いだの、腕が痛いだのとほざいていた。池田は風邪を引いてマスクをしていた。僕は覆面のなかで死ねと思った。

暗幕があがった。お客さんはお行儀良く体育座りだった。スポットライトが当たった。
猿がリズムをとる。僕はメンバー紹介をした。
「ベースの池田」
池田が適当にベースを弾いた。
「ギターとヴォーカルが覆面」
僕は自分で言って、適当にギターを弾いた。
「ドラムのジュン」
ジュンは見た目派手にドラムを叩いた。そのときスティックが折れた。
僕はジュンのそばに駆け寄って、「早く予備のスティックもってこい！」と言った。「そんなのねぇよ！」とジュンは叫ぶ。「ふざけんな！　馬鹿だろお前！」「あぁ馬鹿だよ！」「なんでもいいからスティックの代わりになるもん探せ！」「ねえよ！」
僕もテンパっていたんだと思う。少し考えれば音楽室から借りることもできたのに。そして目についたものは、舞台の隅っこに転がっていた汚れた箒だった。僕はそれを拾って、膝をつかって折り、ジュンに渡した。
「それでやれ！」
「お、おう」
僕たちは演奏を始めた。なぜか箒のほうがジュンのドラムはリズムがとれていた。理由はわからない。わかりたくもない。
僕は必死で歌った。弾いた。跳んだ。走った。池田は今にも倒れそうだった。ジュンは猿だった。お客さんはポカーンとしていた。僕はあまりにアナーキーだった。そもそも、ハイスタを知っているお客さんがいなかった。でも僕は歌った。だからこそ跳んだんだ。走ったんだ。
演奏が終わって、僕はマイクに向かって言った。
「愛してるぜ！　お前ら！　くたばれ！　ファックファックファック！」

覆面のせいか、今までのストレスのせいかわからない。
そう言って、僕はギターをドラムのバスドラに思いっきり叩きつけた。そして暗幕が下りた。
後で先生に怒られた。謝った。調子に乗りすぎました。
僕はジュンと池田は本当に死ねばいいのにと思った。
その後、ライブの感想を人づてに聞いた。ギターの音がうるさかった、とだけ。でも、なぜか、その後一年生がロック部にたくさん入部してきた。
そのせいで僕らはもう少し、ロック部を続けることになった。僕には理解できなかった。なんであんな演奏でロック部に入ろうと思うんだ。なんで僕はここにいるんだ。なにがなんだかわからない。
ジュンはジュン先輩と呼ばれて、池田は池先輩と呼ばれた。二人とも人気があった。なぜだ？　なぜか僕は怖がられた。なぜだ？
知るか。勝手にやってろ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8307s/

ＳＴＡＹ ＧＯＬＤ

2011年5月7日17時40分発行